

相次いだ大地震「偶然」 米研究者

【ワシントン＝勝田敏彦】大地震のあとに他の大地震が誘発されるのは、元々の大地震の震央の千キロ以内にはほぼ限られることが、米地質調査所(USGS)などの研究でわかった。最近、世界で相次いでいる大きな被害地震は、偶然、近い時期に起きたといえそうだ。27日付の専門誌ネイチャー・ジオサイエンスに論文が掲載された。

USGSのトム・パーソンズ博士らは、1979～2009年の世界の地震を分析。マグニチュード(M)7以上の大地震が起きたとき、世界でM5～M7の地震が起きる頻度が増えるかどうかを調べた。

その結果、大地震の震源域の長さの2～3倍以内に当たる千キロ以内では、誘発されたと考えられる地震が増えていた。だが、それ以上離れたところではそうした傾向は見つからなかった。ただ過去の研究では、遠方でも小さな地震は誘発されることがわかっていて、昨年以降、世界では大地震が相次いでいる。昨年は1月にハイチ(M7.0)、2月にチリ(M8.8)。さらに今年、2月にニュージーランドでM6.3、3月には東日本大震災を引き起こした地震(M9.0)、24日にシヤンマー(ビルマ)でM6.8の地震が起きている。